琉球大学学術リポジトリ

Ryudai News Letter `24(Vol.34)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学 公開日: 2024-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 琉球大学 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002020404

News Letter

琉球大学広報誌

2024 April Vol.34

琉球大学
UNIVERSITY OF THE RYUKYUS

https://www.u-ryukyu.ac.jp/

Island wisdom, for the world, for the future.

News Letter Vol.34　2024年4月発行
〒903-0213　沖縄県中頭郡西原町字千原1番地
総務部総務課広報係
TEL.098-895-8175　kohokoho@acs.u-ryukyu.ac.jp

［目次］

●注目！琉大生　02
琉球大学大学院理工学研究科
海洋自然科学専攻　1年次
梅田 雄飛さん

●特集Ⅰ：　03
子どもの居場所運営支援
ＡＩアプリ「うむゆい」

●特集Ⅱ：　05
琉球大学びぶりお文学賞

●特集Ⅲ：　09
授業紹介
・髙良 宣孝 准教授（国際地域創造学部国際地域創造学科）
・谷口 真吾 教授（農学部亜熱帯農林環境科学科）

●ニューストピックス　11

［表紙紹介］

non skins
（琉球大学附属図書館リフレッシュスペース）

附属図書館内の旧製本準備室であり倉庫として長期間使用されていたスペースを工学部の入江徹准教授によりリフレッシュスペースに改修したプロジェクトです。

「新築のような出来栄えを目指すよりも、今後学内でも増加していくであろう改修をよりポジティヴに位置づけ、改修による資産価値の向上をより積極的に訴えかけるようなデザインにしました。具体的には、古くなった壁や床材を取り払い、その際の削り跡や補修跡をそのまま残し、積極的に改修であるという痕跡を残すデザインにしています」（入江先生HPより）

その他、学内には入江先生によるデザインが多数あります。ぜひ訪れてみてくださいね。

（入江先生HP）

注目！琉大生

梅田 雄飛さん
Umeda Yuhi

PROFILE

所属：琉球大学大学院理工学研究科 海洋自然科学専攻
　　1年次
出身県：千葉県

私は「科学がより身近になる環境づくり」を目標に琉球科学教育研究会を立ち上げました。

きっかけは学部生時代、大学が実施する科学教育プログラム「琉大カガク院」にメンターとして参加したことです。指導に関わった高校生が、自ら大学レベルの教科書を購入し、勉強、大学（院）生と実験方法を議論し、その成果で全国や世界で活躍する姿を見て、子どもの持つ可能性に衝撃をうけました！

私は、こういった個性あふれる人材の育成に関わり、持続可能でwell-beingな社会実現に貢献したいと思い、未就学児から参加できる科学教育プログラムの提供を始めました。

このプログラムは、コロナ禍中の2022年８月（当時、学部４年次）にオンライン科学教室として、未就学児から中学生を対象に毎月１回の頻度で始めました。第１回目は参加者４名でしたが、今では対面実施ということもあり、毎回８０名もの子どもたちに参加してもらい、科学を楽しく学んでもらっています。

保護者から「日常的に科学に触れる場所が欲しい」というご要望も多数いただきましたので、現在、科学実験教室設立に向けて準備を進めています。大学と協力し、効果的で楽しめる教育プログラム開発の取り組みとも合わせてOkinawa Startup Program 2023に挑戦したところ、最終選考企業にも選んでいただくことができました。

楽しみながら没頭できる科学教育を通して、沖縄を世界で活躍する人材の発信源にしたいと思っています。これからも皆様のご支援を、どうぞよろしくお願いします。

＜福本先生＞
梅田さんは教育学部卒、理工学研究科に在籍しています。彼は、何かやってやる！という意欲があり、思い立ったらすぐ行動できる人物です。もともと持っていた能力に、経験として積み上げてきた「教育×科学」が組み合わさることで、今回の科学実験教室に至っています。一人で始めた活動が、今ではメンバーも増え、周囲の人間をどんどん巻き込みながら成長しています。いつも笑顔で頑張っている梅田さんは、魅力あふれる学生さんです。

子どもの居場所運営支援AIアプリ「うむゆい」

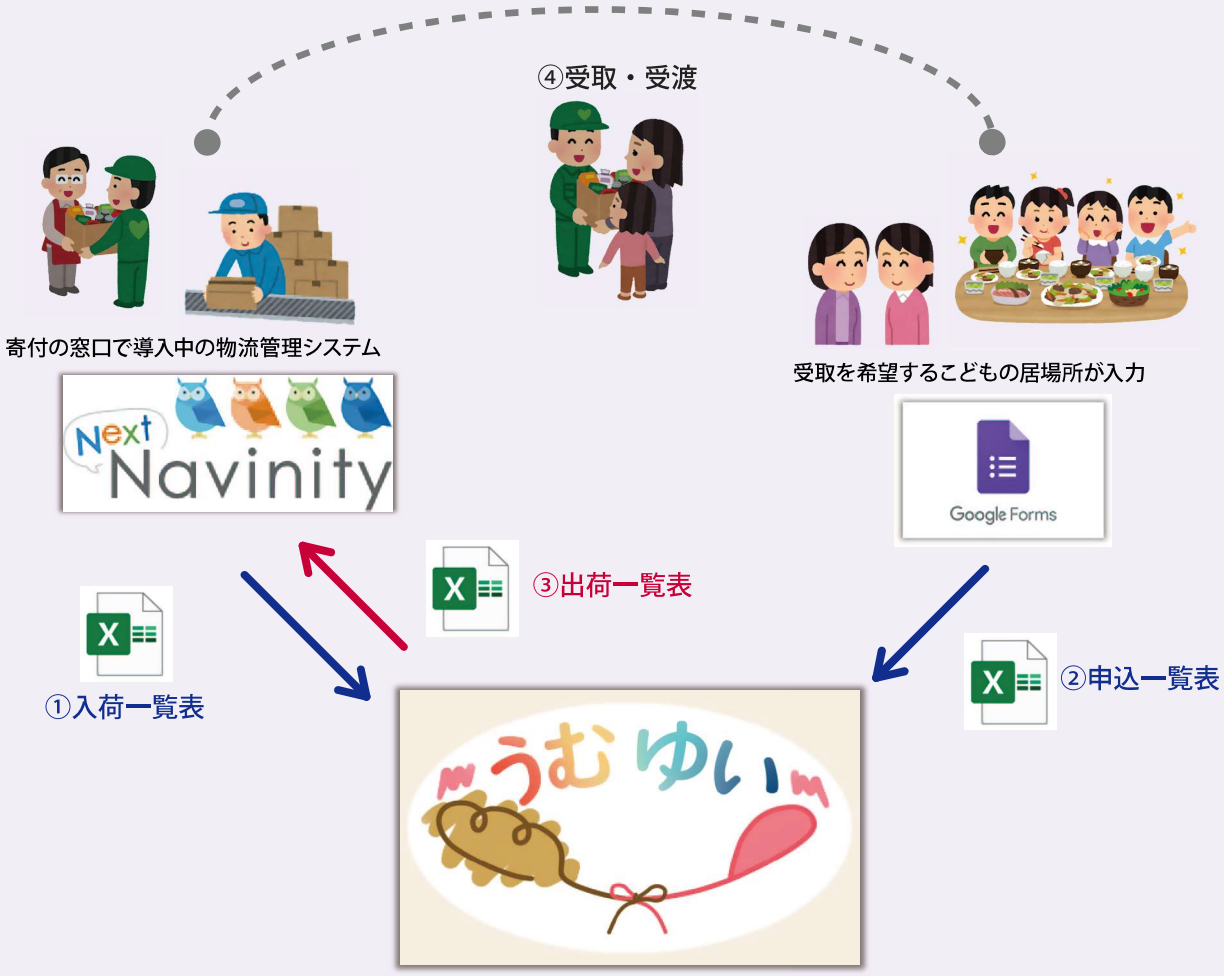
「うむゆい」とは…

企業等から寄贈された食料品を子どもの居場所に確実に届けるために開発したこのアプリは、「想い（うむい）を結ぶ」という意味で「うむゆい」と命名されました。

沖縄県内の子ども食堂や子どもの居場所に食料品などを無償提供している団体「おきなわこども未来ランチサポート」の富田杏理代表が今まで全て一人で行っていた業務をDX化することで、寄付の受入体制を強化し、県内の子どもの貧困対策を産学連携のもとで着実に推進することを目的として、令和4年度は学内の「SDGs社会課題解決型研究再チャレンジプロジェクト」としてスタートし、令和５年度は沖縄県の「大学発SDGs社会課題解決型科学技術プロジェクト創出新事業試験的科学技術プロジェクト委託業務」として改良を行いました。

なお、本アプリはローコード（少ないコード）でアジャイル開発（小さな単位で実装とテストを繰り返して開発を進める手法）されており、基盤は株式会社BlueMemeより提供されています。

寄付を適正配分するAIアプリ「うむゆい」の仕組み



AIが分配案を提案し、出荷一覧表を自動生成

- ○ AIで脱属人化・業務効率化を実現！
- ○ 令和４年度は「開封したらすぐ食べられる食料品」に対応（計5品目）
- ○ 令和５年度は「調理が必要な食料品」や「生活用品や学用品」を拡充（計40品目）
- ○ 今後は、「生鮮食品」や企業や団体だけでなく、個人からの寄附の受入れへの対応も目指す。

このプロジェクトは人文社会学部の本村真教授から相談を受けて始まりました。

卒業論文や修士論文とは全く別ものです。学業と関係ない業種のアルバイトで時間を削られることのないよう、メンバーの学生は技術補佐員ないしは事務補佐員としてこのプロジェクトで雇用しました。大学で学んでいることを生かしてアルバイトをすることで、効率よく開発に集中してもらえる環境を作りを意識しました。

工学部 助教
宮田 龍太

どうやって開発したの？

現在、人が行っている作業をAIで再現するためには、まずはそのルール化が必要不可欠。その担当は陸さん。現在の作業をデータ分析しパターンを抽出することで、ようやくルールが可視化されます。そのルールを確認テスト用に取っておいた事例に適用すると、どれも85%以上の精度で再現ができました。現実とのすり合わせを行いながら、ルールを固めます。

そのルールをアプリで再現するのが盛さんと森根さんの開発チーム。陸さんと分析を重ねていくうちに、人が公平と思うものは少しずつ異なることが分かり、配分のバランスを利用者が調整出来るような仕組み作りをしました。また、現在利用されているシステム（Navinity）では、同じ品目でもシステム入力する人によって違うカテゴリに振り分けられている場合がありました。アプリを正しく機能させるためにはそういったシステム入力のルール作りも必要不可欠な作業です。多岐に渡る作業をメンバー一丸となって乗り切りました。

また、配り間違いの抑止に繋がるよう、見やすく親しみやすいデザインにも気を配りました。

メンバー

※取材当時（2024年3月）

学部ではエネルギー環境工学コースを専攻したので、プログラミングは研究室に配属されてから学びはじめ、卒業研究などを通して出来るようになりました。　自分の中の工学部のイメージは「ものづくり」。何かアプリとか作ってみたいなとずっと思っていました。普段の研究は観測して解析するものが主で、自分以外の誰かに使ってもらえる機会はなかったので、今回「うむゆい」を世に出せたのはいい経験でした。

チームで開発するには、やはり情報共有が大事。お互いに同じくらいの知識を持ち、同じレベルで作れないと作業が進まない。今回のチームは、相互に補完しあっている感じで、それがチームなのだと思いました。プロジェクトをやって自分が一番成長できた気がします。正直まだ直したいところはありますが、ちゃんと機能するものが作れたので満足しています。完成したのでとりあえず一安心です。

盛 拓矢さん（アプリの開発・デザイン）
理工学研究科博士前期課程２年次

研究室での先生とのちょっとした雑談で、僕がアルバイトを探していることを話したら、このプロジェクトに参加させてもらうことになり、勉強しながらアルバイトが出来てとてもありがたかったです。

３年次で研究室に配属され、初めて機械学習に触れて面白いと感じていました。特に自分では先生や先輩に馴染もうと意識していた訳ではなかったのですが、空き時間は研究室で勉強していたことが功を奏したようです。

いつも研究室にいる先輩の盛さんの開発への姿勢は学びになりました。

森根 逸心さん（アプリの開発・デザイン）
工学部４年次

元々、中国では日本語を学んでいました。機械学習に興味を持ち、インターネットで調べた時に宮田先生のホームページを見て琉大に行くことを決めました。こうして、宮田先生のプロジェクトに参加出来て嬉しく思っています。

陸 煒さん（統計・分析）
理工学研究科博士前期課程１年次

私はまだ2年次で研究室に配属されている訳ではないのですが、開発に携わる先輩たちと接し、いい経験ができました。

いつも横で見ていただけですが、私もいつか開発に携わりたいと思います。

末岡 綾乃さん（事務）
工学部２年次

琉球大学 びぶりお文学賞

びぶりお文学賞は、県内の大学生・大学院生（高等専門学校の場合は本科４年次以上）を対象とした創作文学のコンクールです。豊かな教養と自己実現力を有する人材、地域および国際社会に貢献する人材育成の一環として、学生の言語力を向上させ、創造力、表現力、想像力を育むとともに、文化活動の活性化を促進し、地域社会における文学・文化活動のリーダーを輩出することを目的として平成19年度に創設されました。

始まりは、平成18年に附属図書館の教養図書コーナー開設5周年を記念して開催された「読書論文コンクール」です。このコンクールが好評で、今後の計画を検討した結果、平成19年度に「琉球大学びぶりお文学賞」が創設されました。当初は小説部門のみでしたが、第5回からは詩部門が新設され、第７回からは琉大生だけでなく県内の学生にも門戸が開かれ、17年続けてきた歴史ある賞です。

また、第1回から受賞作品をまとめた作品集を刊行し、元本学教育学部の故・上村豊准教授（第1～13回）、沖縄県立芸術大学の阪田清子准教授（第14～17回）の手掛けた装丁の美しさも注目を集めています。

スケジュール　5月 募集開始 ▶ 10月 締切

選考委員の先生に聞きました

◆今年度の審査を終えていかがでしたか。

ここ数年、応募作品の質は全体としてはかなり上がっており、それは今年も同様でした。残念なのはこれはと思われるような作品が無かったこと。内容面では、今のトピックに着想を得た社会性を備えた作品がある一方、極めて個人的で内省的な作品が見られるのもいつもの通り。また SF ものや怪異譚が好まれるという傾向も続いています。ただ例年と違い、沖縄の風土や社会（問題）に根差した作品がありませんでした。

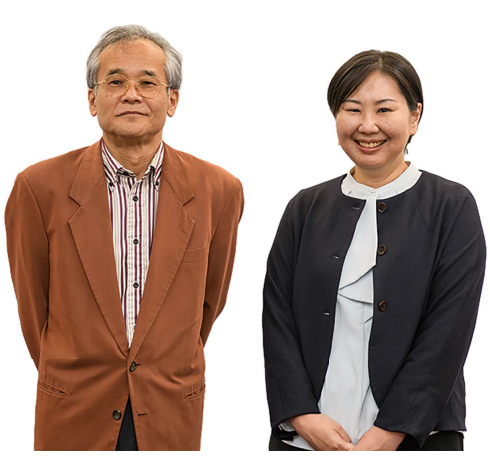
◆「びぶりお文学賞」の魅力は何でしょうか。

卑近な言い方ですが、「書きたい」という欲求、「認められたい」という欲求を満たす捌け口を若い人たちに提供している点は大きいと思います。人生は苦難に満ちています。若い時期にはそれは殊の外強烈で圧倒的に思われます。その中で日々煩悶しながら生き続けている者に、文学は一つの光明を与えてくれるはずです。賞はその光明に至る道筋の一つをささやかながらも与えてくれるもの、と思いたいです。

◆印象に残っている作品はありますか。

二つの作品が挙げられます。まず西上正浩さんの第十一回（2017 年度）受賞作『乗り物の鼓動』。学生生活の日常と恋人との別れが実に素直に淡々と、しかし詩的に語られていました。少々スマート過ぎて「小説」としてはやや淡白かもしれませんが。もう一つは葬ヤマメさんの第十五回（2021 年度）受賞作『かわく肌』。同性間の性愛がさりげない筆致で淡々と、しかしそのくせ実に官能的に（卑近にならず）描かれていて感心しました。

小説部門 選考委員
西森 和広（琉球大学国際地域創造学部 教授）



◆今年度の審査を終え

今年は正賞の選出はありま
いるように思えます。コロナ禍
にこもった印象のものが多く、
やはり社会情勢に執筆者が影
ず、なかなか人間関係が作れ
し、１人の時間を生かしてしっ
るものもあって、作品にじっく
一昨年は多かったと思います。

◆「びぶりお文学賞」の

「この人はこういう映画が好
なんだろう」というのが、ダイ
す。書くことのプロになるので
養の摂取は必要なこと。一度
が、うまく消化出来ずそのまま
うケースは問題
の文学賞の中で
にそのままスライ
です。学生の皆さ
中の人たちなの
す。

沖縄国際大学
業もありますが、
お文学賞に応募
授業の中だけで
にこういった文
に役立ってると

小説部門 選考委
村上 陽子（

担当者に聞きました ――応募作品を読んで感じたことは？

（徳元）我々は事務担当なので選考には直接関わりませんが、応募作品を読むとやはり正賞・佳作をとる作品は、自然と情景が頭に浮かんでくる気がします。選考は、小説部門と詩部門に分かれ、それぞれ全ての応募作品を選考委員の先生方に送り、個別に審査していただいた後、選考委員会で正賞と佳作を決めますが、委員の意見が一致するケースが多い印象です。選考の段階では、学部や作者名などは分からないようになっていますが、意外と理系の学生も多いです。

学生の皆さんが日々の授業を受けながら、論文なども書きながら、創作活動をしているという点は尊敬してしまいます。

（川畑）これまで小説を読む機会の方が多く、詩を読んだ経験はあまりありませんでした。しかし、応募作品を読ませていただくことで詩にも関心を持つようになりました。事務業務を通してではありますが、学生の皆さんがしっかりと時間をかけて選び抜かれたひとつひとつの言葉と関わらせていただいているという点で貴重な経験をさせていただいていると感じています。

附属図書館情報サービス課 サービス企画係
係長　徳元 美智子さん（左）
係員　川畑 宗太さん（右）
※所属はインタビュー当時（2024年3月）

12月 結果発表 ▶ 2月 授賞式

ていかがでしたか。

せんでしたが、そこにはコロナ禍が関わって
の作品というのはそれ以前のものと違って内
その分深みがありました。
響されていたようです。コロナ禍で人と会え
ないというようなリアルな作品もありました
かり歴史的な背景を調べたのかなと感じられ
り向き合って書いたと思える作品が、昨年・

魅力は何でしょうか。

きなんだろう」とか、「この作家がすごく好き
レクトに分かるような作品が多く見られま
したら色々なジャンルの作品を読むという栄
自分を通った表現になってれば良いのです
引用してしまったり、有名作品に酷似してしま
です。とはいえ、びぶりお文学賞は学生限定
も非常にレベルが高く、応募作品は一般文芸
ドして応募できるだろうなと思うものも多い
んは今、正に何か一つのことを極めている最
で、出てくる知識が具体的ですごく面白いで

には小説や詩を書く文学実作演習という授
学生がそこで書いたものを手直ししてびぶり
するといった流れもあります。
完結せずに公の評価を貰えるので、琉球大学
学賞があることは、沖縄の文学全体の底上げ
思います。
員
沖縄国際大学総合文化学部 教授）

第17回 授賞式

受賞作品

◆小説部門
佳作：2編
「これは小説である」 野口 佳さん（琉球大学 理学部 数理科学科3年）
「香食」 土木 団さん（琉球大学大学院 理工学研究科 博士前期課程2年）

◆詩部門
正賞
「うたたね」 二藤さん（沖縄国際大学 総合文化学部 日本文化学科4年）
佳作：2編
「遺伝する生と」 藍原 知音さん（琉球大学人文社会学部 琉球アジア文化学科 2年）
「肚の蟲」 富井嫉妬さん（沖縄国際大学　総合文化学部人間福祉学科3年）

※受賞当時（2024年3月）

たまたま試験勉強のために図書館に行って、その時「びぶりお文学賞」の張り紙を見つけました。そして今まで創作を全くしたことはなかったのですが、ふと書いてみようと思い書き始めました。その日の晩はトマトスパゲティを作って食べたのをはっきりと覚えています。ぼくは何か挑戦したいことが見つかった日は無性にパスタを食べたくなるのです。

その後、書き終えることができたことに満足して、メールが届いたその日まですっかり応募したことを忘れていました。というのもぼくはあまり物事を継続して行うことが得意ではなく、大体は一週間もせずに飽きてしまうのです。それでも今回は不器用ながらにも最後まで書ききることができて、応募した時点で既に達成感がありました。まさかこんな物語に賞を頂けるとは思っていなかったので驚きが大きかったです。

近代美学や形而上学に関する本を何十冊も読んで、「美しさとは何か？」という問いを抱きました。またその美あるいは技術を体現する芸術家にも興味を持ちました。そうした疑問に対し物語を通して、自分なりの結論のような何かを求めていたのだと思います。結局書き終えた今でも結論を出すことはできませんでしたが、たくさんの情報に触れることで考えを深めることができました。正直なところ書くことができたことより、書けなかったことの方が圧倒的に多くて自分の表現力の低さを悔しく思います。構想や表現、構成についても後悔することが多く書き直したい箇所も多くあります。それでも未熟ながら何とか自分なりに書ききることができ、賞を頂きました。さらに多くの本を読み豊かな物語に出会い様々な表現を身に着けて、いつかまた機会があれば同じテーマについて全く別の世界観で再度書いてみたいと考えています。もしそんな日が来たなら、きっとその日の夕食にはカルボナーラかペペロンチーノを食べていることでしょうね。

第17回 小説部門佳作

「これは小説である」

野口 佳さん

（理学部３年）

第17回 小説部門佳作

「香食」

土木 団さん

（理工学研究科 博士前期課程２年）

小学生の頃から江戸川乱歩や芥川龍之介が好きで、中学生の頃から友人に誘われて色々なジャンルの小説をチョロチョロと書いては完結させられないでいました。だから、ちゃんと完結させて文学賞に応募したのは今回が初めてです。びぶりお文学賞に応募したきっかけは、大学図書館でびぶりお文学賞の作品集を読んだこと。ふと自分の作品を誰かに講評してもらいたいと思いました。厳しい講評で自分の悪いところを改善し、面白い話が書けたらと思って。また、就職活動をする中で、自分の弱点が分ればいいなと。自分を客観視したいという想いもありました。

「香食」は少し複雑な、というか分かりづらい作品です。小説や物語というのは一周で終わり、みたいなものが多かったので、「多分ここが分かりづらいだろうな」と思いながら、細かい仕掛けをたくさん作って謎を残しました。何度も読んでいくうちに新しい発見があるような物語を味わって欲しかったのです。しかし、改めて完成した作品を読んでみるとこれは万人受けはしないなと（笑）。江戸川乱歩の気持ち悪いところばかりを詰め込んだ様な作品に仕上がってしまって、佳作をいただいたことに不思議な感じがしました。

今回のびぶりお文学賞をきっかけに今また新たな作品を書いていて、全国的な賞にに出してみたいと考えています。それが良い結果でも悪い結果でも自分の糧になるなと思っています。

第17回 詩部門佳作

「遺伝する生と」

藍原 知音さん

（人文社会学部 琉球アジア文化学科２年）

詩を書き始めたのは大学に入ってから。高校までは文芸部に所属していましたが、書き手ではなくて裏方として文芸誌の編集をしていました。でも書き手をやってみたいとはずっと思っていて。琉大に入学してからびぶりお文学賞の存在を知り書いてみようと思ったのが昨年のことでした。でも、これまで詩とは無縁で、応募するなら小説だろうと最初は思ったのですが、素人なのでやっぱり最初は詩をやってみようかなと思って。それが思いのほか楽しい世界だったので、このまま詩でいこうと決めました。

びぶりお文学賞に応募した一番の狙いは、正賞云々ではなく講評をいただけること。応募した知人の結果は気になりましたが、自分の事は講評いただければいいかなと。文学賞に応募する上でそれではいけないのでしょうが、でも私はそうでした。

今回受賞した作品には「社会的・文化的役割を性別で決められるのが嫌だ」というジェンダー規範への反発がメッセージとして込められています。私の詩は自己を投影するスタイルなので、ネタ切れがちょくちょく発生します。だから、丸々1ヶ月書かない時期もあって。でも詩を書き始めてから感情の持ち方が変わりました。何もしていない時の空っぽな感情も言語化出来るようになり、その時の心境や、考え方の変遷もそのまま作品にできることが詩の面白さだと思っています。

※取材当時（2024年3月）

第16回 小説部門正賞

「機械少女の亡霊」

宮森 日向さん

（人文社会学部 国際法政学科３年）

小説を書き始めたのは、大学に入ってからでした。きっかけは1年の時の琉大祭。文芸部の出した文集を読んだら、その中でひとつすごく良い作品があったのです。それがきっかけで文芸サークルに入ったのですが、ただ入るのもあれだなと思い、手土産的に４作書きました。。その中から１作ずつ琉大のびぶりお文学賞と名桜大学の名桜文学賞に応募したら、びぶりお文学賞で正賞、名桜文学賞でも最優秀賞をいただきました。

作品のテーマは「現代を生きる若者の等身大の葛藤」。僕はイラストや漫画など、絵を使った表現も好きで手を出してきました。でも、技術がどんどん進化してAIなどで絵を描いたり、画像の加工や動画作成までできるようになってきました。自分の力でやっている感じでなくなってきたけれど、技術革新に恩恵を受ける部分もあったりしてやれることも増えた。そんなどっちつかずなことを小説では書けるところが魅力なのかなと思っています。

今はこれまでで一番長い長編小説を執筆中。びぶりお文学賞も名桜文学賞ももう応募できないので別の文学賞に応募するつもりです。

第16回 詩部門正賞

「宝物の音」

木兎さん

（学部３年）

私は高校の頃から文芸部で、ずっと小説を書いていましたが、今は詩をメインに書いています。高３の時に琉球新報さんの「神のバトン賞」という小中高校生を対象にした詩のコンクールに勢いで出したら賞をいただいて、意外と小説よりも詩のほうが相性が良いなと思って。それからは詩を書いていたのですが、３年生になってからは実習があったり、レポートも課題も多くて忙しくてなかなか書けないでいますが、断片的に「この言葉いいな」と思いついたらすぐに何かに書き残してます。

文芸部では毎年琉大祭で販売する文芸誌を作っているのですが、去年出したものには、謎解きを仕掛けた思いきり暗いものを書きました。文章の中に仕掛けがあって、言葉が出てくるみたいな。今、逆に1人のお茶会をイメージした、ほのぼのした作品を書いたりと、結構色々なものを書いていて、ジャンルは特に定まっていません。

昨年正賞をいただいた「宝物の音」は、テレビで三線の演奏を聴いた時に思い浮かんだ詩です。三線の音を聴いていたら、何となくおじいちゃんが昔弾いてた三線の音とか、そのときの風景がぱっと浮かんだので、これを詩にしたいと思って。でも、正賞受賞の連絡がくる３日前におじいちゃんは亡くなってしまって。未だ、報告できないでいます。

受賞作品をまとめた作品集について、ウェブ上でも全文を公開しています

バックナンバー一覧

第17回

第16回

国際地域創造学部国際地域創造学科
准教授

髙良 宣孝先生

英語コミュニケーションの多様性

自己紹介

2013 年に母校でもある琉球大学にコミュニケーション学領域の教員として赴任して、今年の 4 月で 12 年目に入ります。私達が普段当たり前のように行なっているコミュニケーションが、深く観察するとどれ程複雑で興味深い行為なのか、学生に少しでも実感してもらえるよう心掛けて講義を行なっています。特に「英語コミュニケーションの多様性」では、世界中で話されている「英語」の多様性について感じてもらえるよう心がけています。

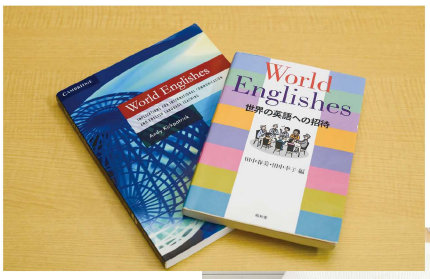
講義の概要

「英語コミュニケーションの多様性」は、世界中で話されている多様性に富んだ「英語」に関して様々な観点から考えていく講義です。講義は穴埋め式のハンドアウトを使用し、毎回のクイズと学習のまとめ、複数の課題と期末試験で構成されています。

「英語」はイギリスで誕生し、様々な言語の影響を受けながら成長し、その後アメリカやオーストラリアをはじめ、インド、東南アジア、アフリカ諸国、等と世界中に広まり、現在では世界共通語の役割を担っています。しかし、世界各地の「英語」を分析すると、その発音・文法・語彙が多様性に富んでいます。多くの人が標準的な英語と考えるイギリス英語とアメリカ英語を比較しても、"hot"の母音の発音が違ったり、「秋」を表す語が異なったり（英：autumn、米：fall）します。他にも、インド英語では語中の"r"の発音が標準英語と比べて特徴的ですし、フィリピン英語では、スペイン統治下の影響でスペイン語由来の語彙が使用されていたり、現地の言語であるタガログ語の影響も見られます。このように、世界各地で話されている「英語」はその国や地域の言語・歴史・社会・文化の影響を受けた「英語」であり、この講義ではこの多様性に富んだ「英語」（専門用語では「世界諸英語（World Englishes）」と言います）を学んでいきます。

講義の中で大切にしていること

講義では、世界中の様々な「英語」に触れることで、多くの学生が抱えているであろう「英語コンプレックス」を少しでも減らせるよう意識しています。日本人の多くは、アメリカ英語



のような「正しい英語」でなければ通じない、と思い込んでいます。しかし、世界各地で話されているどの「英語」にも特徴的な発音・文法・語彙が存在し、それらはその国や地域の言語・歴史・社会・文化が影響して生まれたものです。その意味で「日本人の英語」も「日本人の特徴的な英語」と捉え、コミュニケーションを図るうえで有用な「英語」だということを意識して伝えています。

講義を通して学んでほしいこと

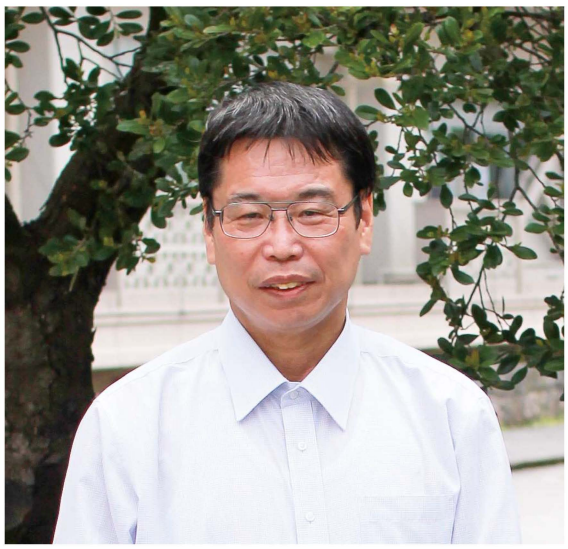
講義で学んでほしいことは、「ことば」は歴史・社会・文化と深く関係しているという点です。例えば、インド英語の誕生はイギリスの植民地支配による影響が大きく、またインド英語の様々な特徴はインドの言語や文化、社会の仕組みの影響を受けています。フィリピン英語の場合も、フィリピンがスペインやアメリカの支配下にあったという歴史的事実やタガログ語の発音・文法・語彙も深く関係しています。このことは「世界諸英語」だけでなく、どの言語に関しても言えることです。「ことば」だけでなく、関連する歴史・社会・文化についても常に一緒に学んでほしいと思います。

造林学

【造林学の学びを深める基礎専門科目としての森林植物学、樹木生理・遺伝育種学、造林学実習】

自己紹介

私は本州西端、東西に長く連なる中国山地東端に続く山々に囲まれた播磨平野で生まれ育ちました。大学では中国山地の大山や蒜山をフィールドに林学・森林学を学びました。卒業後に就職した公設の林業試験場では 18 年間、林業研究職員として中国山地の氷ノ山や扇ノ山を主な研究フィールドとして研究を行いました。今年で勤務 18 年になる琉球大学農学部では森林科学を専攻し、専門は造林学、森林生態学です。生物多様性の高い沖縄島北部「やんばる」を研究フィールドに人工造林した木材生産林の育成技術の開発、天然生林の営み（動態）を探りながら生物多様性の保全と森林の修復に関する研究、樹木の成長・繁殖・生存など樹木の一生を記述する生理生態学からみた生活史の研究を行っています。



農学部亜熱帯農林環境科学科
教授
谷口 真吾先生

講義の概要

造林学は経済林や環境林など、人類に役立つ価値のある森林を効果的な方法で造り育てるための理論と方法を探求する学問です。また、実験や理論的に得られる原則を造林技術として体系的に応用する実践的な学問でもあります。造林学は2年次後学期に学びます。造林学は1905年（明治38年）に本多静六博士が日本最初の教科書「要提造林学」を刊行され創始された120年近い歴史のある学問です（日本の林学の始祖は1882年：東京山林学校）。科学的あるいは理論的に森林の設計図（目標林型）を描き、そこに至るまでの効果的・効率的な施業技術を創出する学問体系が造林学です。造林学の講義では、生物資源である木材・木質資源を人為的な管理で効率的に生産する人工林施業を学びます。さらに自然林や天然林に学び、森林生態学の知見に則り、自然力を最大限に活かした持続可能な森林の取り扱いと森林の保育管理技術を学びます。その導入としての基礎科目は、森林を構成する基本単位である樹木の外部形態と内部構造を細胞、組織、器官、個体レベルで学び、樹木の成長機構と繁殖様式を身につける森林植物学と樹木の光合成や呼吸、蒸散を中心とする生理機構のしくみや樹木の遺伝様式を学ぶ樹木生理・遺伝育種学の2科目の専門科目を2年次前学期で学びます。

講義の中で大切にしていること

造林学は、森林の恩恵をすべての国民と共有するために適切な森林の保全や管理技術を研究する実学としての学問でもあります。私の講義では、受講生の皆さんに造林学的な科学的知見を提供する研究者、その科学的知見を現場に適応させる実務者、科学的知見に基づいた政策を立案・運用する政策決定者のいずれかの職に就いていただくための知見や知識を確実に定着させる講義を目標に15回の講義内容を組み立てています。同時に造林学の実学の部分を実際の森林内で実践的に学ぶ造林学実習も併設し、森林植生、樹木、土壌、森林環境の調査、観察、測定を実習しその学びを高めています。

講義を通して学んでほしいこと

日本は国土面積の70%が森林で覆われています。森林があることにより、国民に木材生産や地球温暖化の緩和、国土保全（山地崩壊防止）や水資源かん養、文化・教育、健康に対する効果など多岐の恩恵を与えてくれます。造林学はとにかく幅の広い学問です。扱う学問領域の時間的なスケールは1時間、1年、人工林が育成できて伐採収穫できる60～80年、天然林の動きが安定する150～300年です。さらに扱うレベルとして、分子、組織、器官、個体、群落、景観などの空間的スケール、原理やメカニズムを探求する基礎研究から応用研究と自然科学から社会科学までの広い範囲の学問領域を扱う多様で多彩な学問分野です。造林学の知見を林業現場に応用科学として技術実装することもあります。皆さんの学んできた幅広い知見と知識を活かしながら、造林学のスケール感、レベル感を楽しんで欲しいと思います。

UR Topics

[10/23]
2023年度「鎌倉フェローシップ・沖縄ロースクール奨学金」目録贈呈式

[11/27]
本学エコロジカル・キャンパス学生委員会が沖縄県環境保全功労者表彰を受賞しました

[11/30]
台湾で学ぼう！～台湾交換留学展～を開催しました

[12/13]
おきなわ国際協力・交流フェスティバルに出展

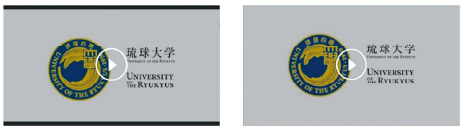
[1/4]
【学生のみなさんへ】令和６年能登半島地震について

「令和６年能登半島地震」にて被災された方に心からお見舞い申し上げます。
ご家族が今回の地震で重大な被害に遭われ、学業に支障が生じるなど、不安なことや困りごとがあれば、所属学部・研究科の学務担当係にご連絡ください。

[1/18]
2024年 学長年頭挨拶

[2/8]
令和５年度第３回及び第４回学生と学長との懇談会を開催

[2/16]
琉球大学紹介動画をリニューアルしました！



[2/27]
法務研究科法務専攻３年の高嶺真帆さんが、
「刑事政策に関する懸賞論文」で佳作を受賞

[2/28]
第41回沖縄県外国人による
日本語弁論大会で２位と３位受賞

[3/5]
沖縄島・恩納村の海底洞窟から新種ヤドカリを発見！

[3/11]
琉球大学発ベンチャー認定称号授与式を行いました

琉大ブランド商品

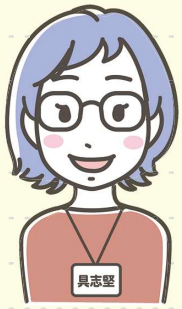
琉古株仕込み 琉球大学の泡盛 （30度）

琉球大学、（株）バイオジェット、（有）神村酒造との共同開発による新たな黒麹菌【琉古株】を用いて醸造した泡盛です。

琉古株とは、1935 年に泡盛もろみから分離・保管されていた株で、現在用いられている泡盛黒麹菌株とは最も古い時代に分岐した株として選抜されました。琉古株の利用は、琉球王朝時代からつながる古来の泡盛醸造技術の一端を復興したといえます。

醸造には、本学農学部の学生（７名）も参加しました！

他の泡盛と比べても、
まろやかで香ばしく、
とても濃厚です！
ロックで美味しくいただきました！



神村酒造
オンラインショップ

豊かな未来社会を共創する琉球大学基金

一般基金

※使途を大学に一任される場合は、こちらをお選びください。

教育・研究等の大学運営全般のために

- 学生の課外活動
- 社会との連携事業
- 研究活動への支援
- 施設・設備整備事業等

特定基金

農水一体型サステイナブル陸上養殖共創拠点形成基金

「サステイナブルな食の未来」を若者が主役となって実現するために

「食」「エネルギー」、そして「人材」の好循環による資源循環型共生社会。農業と水産業が融合した新産業が創られ、世代を超えたすべての人が環境負荷ゼロで、食資源の確保と経済的な自立ができる社会を目指しています。

特定基金

修学支援基金［税額控除対象］

経済的に修学が困難な学生のために

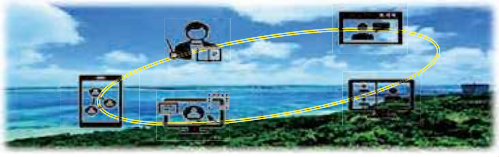
- 授業料等の免除による支援
- 学資金の貸与、又は支給による支援
- ティーチングアシスタント、リサーチアシスタント学生の生活サポート

特定基金

「つながる離島・広がる沖縄」教育未来基金

沖縄県離島地域及び北部地域の教育環境向上のために

- ICTを活用した教育環境向上の支援
- ICT機器整備の支援等



特定基金

沖縄健康医療推進基金

沖縄の健康医療発展のために

令和6年、西普天間住宅地区跡地へ移転予定の医学部及び同附属病院において、より快適で安全な医学教育・研究、診療環境を提供します。

上図：完成イメージ※今後の進捗により変更になる可能性があります。

特定基金

岸本遺贈基金

次世代グローバル人材の育成のために

本学同窓生である岸本正之氏が多摩子夫人と共に米国にて設立した岸本ファミリー個人慈善基金の運用益を本学へ毎年ご寄附いただき、地球自然環境保全に向けた教育・研究活動やグローバル人材育成等を目的とした事業を実施しております。

特定基金

QUEST 基金

未来へつながる学生の探求心の向上のために

- 学生の海外派遣の支援
- 外国人留学生に対する支援
- 海外留学準備サポート
- 学生生活の支援等

特定基金

うない女性研究者・リーダー育成基金

男女共同参画を推進し、次代を担う女性人材のために

- 次代を担う女子大学院生、学生の人材育成及び支援
- 若手女性研究者の研究力向上の支援
- 女性研究者が安心して働ける職場環境の整備等

特定基金

結転生（ゆいまーる）基金

社会的課題である貧困の連鎖を防ぐために

- シングルマザー雇用による経済的自立支援（琉球大学職員として採用し、実技技能の向上を支援します）
- ひとり親世帯の子どもへの就学支援